

司式: 鮎川 健一
奏楽: 吉田千鶴子

この世の贖い主にして永遠の救い主、真の光なる御子イエス・キリストの父なる御神さま、聖名を褒め称え賛美致します。

前奏: 「神もしこの時われらと共にいませずば」 (D. フクステファテ)

5月の新たな月を迎え、また暦の上では八十八夜を過ぎ、立夏を迎え、夏に向かう季節の変わり目を過ごします。その中で、これまでの歩みが守られ、導かれ、再び、新たな命と共に御前に立ち、額づくことを赦され感謝致します。そして今、礼拝を献げるにあつて、夫々の場において主の招きに応え、この時を迎えています。

招詞: わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に置く。(エゼ 36:26a)

過ぐる一週間、主なる神は、私たち一人ひとりを御心に留め、祝福の内に新たな道を備え、必要な物で充たしてくださいました。しかし思い返すにあつては、主の御心から遠くあったことも覚えます。繰り返されるこの弱さを自覚して、御前に罪を告白し、悔い改めを申し上げます。どうか主の御赦しの内にありますように。御言葉の真理により、御霊の力により、再び立ちあらせてください。

讚美歌 20「主に向かってよろこび歌おう」

このような私たちであっても主なる神は、猶予を以て祈りと賛美の時、神の御心を知る時、悔い改めと感謝の思いをお献げする時を与えてくださいました。主の深き憐みにより、私たちは御心に触れるべく、主なる神への献身の思いを、心新たにし、救いしなる御子イエスを、“真の人にして真の生ける神”と告白します。御光の内に歩む者とされますように、御霊の導きと御助けを願います。

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①詩編 95 編

- 01 主に向かって喜び歌おう。救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう。
- 02 御前に進み、感謝をささげ/楽の音に合わせて喜びの叫びをあげよう。
- 03 主は大いなる神/すべての神を超えて大いなる王。
- 04 深い地の底も御手の内にあり/山々の頂も主のもの。
- 05 海も主のもの、それを造られたのは主。陸もまた、御手によって形づくられた。
- 06 わたしたちを造られた方/主の御前にひざまずこう。共にひれ伏し、伏し拝もう。
- 07 主はわたしたちの神、わたしたちは主の民/主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。
- 08 「あの日、荒野のメリバやマサでしたように/心を頑くしてはならない。
- 09 あのとき、あなたたちの先祖はわたしを試みた。わたしの業を見ながら、なおわたしを試した。
- 10 四十年の間、わたしはその世代をいとい/心の迷う民と呼んだ。彼らはわたしの道を知ろうとしなかった。
- 11 わたしは怒り/彼らをわたしの憩いの地に入れないと誓った。」

朗読聖書②マタイによる福音書 6:1-8

◆施しをするときには

- 01 「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。
- 02 だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言っておく。彼らは既に報いを受けている。
- 03 施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。
- 04 あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

◆祈るときには

- 05 「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。
- 06 だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。
- 07 また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思ひ込んでいる。
- 08 彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。

また、この有限なる地上にあつて、様々に起きる出来事は、主の御心から遠くあることも否認しません。このような道すがら、先の見えない思いに駆られても、主の御業の確かさ、また偉大さを覚え、世界の平和、日本の平和のためにも祈ります。戦乱や混乱、経済や、また社会活動の不安定さにあつて、日常生活が揺るがされ、度重なる自然環境の変化により、人々の心に翳りが色濃く、また長きにわたる不安の諸課題も重なる中にあつて、世界情勢は一層の厳しさを迎えています。どの国の人々も支援や協力に携わる人々の労多く、不安や苦しみ、また悲しみに置かれています。主の日を迎えてこの時に、救いの御光が見えない人々に、困窮の最中にある人々に、主の慰めと癒しが特別にありますように。また一日も早く混乱が治まり、共に主を見上げて歩むことが出来ますように。私たちキリストに従いゆく者として為すべき務めが果たせますように。また心にありつつも、この場に集い得ない人々、様々な思いにある人々が復活の主の招かれ、導かれて、御言葉と共に新たに生きる力が与えられますように。

これより佃雅之牧師により、主の御言葉が取り次がれます。御霊の導きを豊かに受け届けられますように。また聴く私たちも、御言葉の力と共に新たな命を得て、ここから遣わされていきますように。

主にある平和を祈り願う信仰の友の祈りに合わせ、尊き主イエス・キリストの御名によって御前にお献げいたします。アーメン。

讚美歌: 495「しずけ祈りの」

説教: 「天の父の前で」

佃 雅之

キリストは、或る時、山に登られ、弟子たちに説教を語られます。この福音書を書いたマタイは、5章から7章までにキリストの語られた教をまとめて書き残しました。教会では『山上の説教』と呼ばれる個所です。

此処で語られていますキリストの説教には、基本的な考え、原則があり

ます。“あなたは何かをするときに何を心がけているか”、“あなたの心は何を目指しているのか”、“あなたの心はどこに向いているのか”、と問いかけるのです。“天の父は、あなたが何をしているか、あなたが、何ができるかという外面的なこと、上辺のことをご覧にはならない、天の父が見ておられるのは、あなたの心、あなたが心に思ったことを全て知っておられる”というのであります。

私たち人間は、人の心を見抜くことは出来ませんから、偽物を称賛するということもあり得ます。しかし天の父は、私たちの心の全てを見抜くお方です。キリストは「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる」と、語り出されます。ここでキリストが禁じられたのは、“私たちが「人の前で善行を行うことではなく、「見てもらおうとして」、何かを行うこと”です。“あなたのしていることが正しいこと、正義の行為であったとしても、人からの評価を期待して行うなら、あなたは天の父からお褒めに与ることは出来ない、「報いをいただけないことになる」と、主は言われます。

聖書の「報い」は、終末、終わりの日の審きと密接です。終わりの日、私たちは天の父の前で“祝福”、あるいは“呪い”の言葉を聴かなければなりません。善いことをしている時、私たちは“神に仕えている”という錯覚に落ちることがあります。しかし、その行為が、御心に適うような義しいものであったとしても、“見てもらおう”として、しているなら、その時のあなたは、“行為の奴隷”になっているのであって、主の忠実な僕では決してない。私たちは何かを求めて、何かを願って行動を興しますが、大切なことはその場合の動機です。父なる神は、私たちの心を見ています。“信仰生活とは人間中心から神中心へと生き方の向きを変える生活”です。“神の前に立ち、神を見て生きること”であります。

しかし私たちは、“自分のしている善いことを人に見てもらいたい、褒められたい、評価されたい”、心の底で何時も人からの称賛を欲しがります。人の歡心を買おうとする気持ちが働きます。私のしていることを知って欲しいのが私たちでしょう。人間であれば、おそらく誰にでもあることです。正しい善い行いをしているという自意識が次第に、“私は優れている”という思いを引き起こします。

当時のユダヤ人社会では、貧しい人への「施し」が美德とされ、称賛されてきました。「施し」をする者が会堂や街角で「ラッパを吹いて、人を集めて見せびらかしていたのです。キリストは、その様子を見て「偽善者」だと言われます。「偽善者」(ἰσχυροκρίτης) (ἰσχυροκρίτης) という言葉は「俳優、役者」という意味を持っています。“人に観られようとして本来の自分でないものを演じる”ことの譬えとして、この言葉が使われています。教会においても、私たち一人ひとりの生き方においても、“自分に無いものがあるように見せる”、“自分をよく見せようとする、良い恰好を見せようとする”者を主は「偽善者」と言うのです。称賛を求めて、見返りを求めて何かを行うなら、それは「偽善者」と呼ばれるのであります。主は「偽善者」に対して「彼らは既に報いを受けている」と言われます。「偽善者」は、自分では御心を行っているつもりでしょうが、実は罪を犯しているのですから、神の国に入ることが出来ません。人間からは称賛されるかもしれませんが、人間の称賛はその場限り、一時的なものです。

「施し」(ἐλεημοσύνη) (ἐλεημοσύνη). ヘブライ語「אַהֲבָה」(אַהֲבָה) [あらゆる領域における愛の行為] という言葉は語源に「憐れみ」という意味を持っています。“親切な行為”と言ってもいいでしょう。“人に対する親切とは、その人を愛する”ということですから、上から下へと手を差し延べることはありません。“共感と連帯”

です。「施し」とは、“人の痛みに寄り添う”こと、私たちが“持っている物を分かち合う”ことであります。教会に連なる私たちが、分かち合わなければならぬものはお金や品物だけではなくて、“キリストの福音が宣べ伝えられ”なければ、本当の意味で、誰かを慰めることも、励ますこともできません。

キリストは此処で「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない」と言われています。右手も左手も、自分の心と体に繋がっているものなのですから、右手がよく働くからと言って左手が右手に“ありがとう”とお礼を言うことはありません。「施し」をするときは、それほど自然に、当たり前前の行為として“さりげなくしなさい”と言うのです。自分自身にすら“よくやった”“私は善いことをした”と伝えない、自意識からも解放されなければならない。私たちは自己満足や己惚れという誘惑に、いつも陥る危険の中にいる者です。“自分の善き行いを人に観られたい”という思いから、本当に自由であるかどうか、“自分の満足のために、自己肯定感を高めるために他者を利用するような事をしてはならない”、“他者をあなたの名誉のための道具としてはならない”ということです。繰り返しますが、「天の父」は、私たちの心を見ています。隠された行為は目には見えない、隠れた所におられる神によって見られています。

このことは、「施し」だけでなく、5 節以下の「祈り」についても全く同じであります。「祈り」とは神との会話でありますから、なおさら人に見せるものではありません。「祈り」は、ただ神に向かって真つすぐに為されるべきものです。「施し」と同じように、人に見せようとして、人に聞かせようとして、「会堂や大通りに立って祈る」祈りは、どれほど内容が豊かであっても、言葉が整っていたとしても、空しい祈りになります。人に聞かせるための祈りは、私を「偽善者」としてしまふ誘惑です。

私たちは、いろいろな所で祈ります。日常の中で、朝起きて、夜寝る前に、食事の時もしばしば祈ります。時に、教会の中では、「祈り」を誰かにお願ひすることがありますが、人によっては祈ることが苦手を乗り越えて恐怖を感じる人も居ます。人前で「祈り」を強いることは、かえってその人を神から引き離すことになりかねません。そのことをきっかけに教会から離れてしまうということもありますから、十分な配慮が必要です。人前で祈る時は、おそらく誰でも緊張すると思います。祈り会では出席された方全員が祈りますから、だんだん自分の順番が近づいてくると、緊張のあまり言葉が出て来ない、頭が真っ白になって、結局何を祈ったかかったのか、何を祈ったかも覚えていない。皆さん経験があるのではないのでしょうか。不安や緊張が先立って、“天の父との会話である”ということが忘れられてしまうということもあるでしょう。その人の心の中にある願いや祈りが、とても人前で話すことの出来ないということもあります。他の人には分からないことが沢山ある、知られたくないということもあるのではないのでしょうか。

キリストは、「だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい」と言ってくださいます。“心の中に父と私だけの密室を造れ”と言うのです。「祈るときは」、父なる神と私の間には何者も入れてはならない。天の父とあなたとの親しく交わる貴重な時間と場所を造ることが大切なのです。あなたは、天の父と二人きりになって、あなたの心を注ぎ出せばよいのです。その時、その所には、神との豊かな命の交わりが形づくられます。このようなことを求めてもいいのか、このようなことを祈り願ったらどう思われるか心配する必要はありません。

キリストの使徒パウロはこう言いました。

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささ

げ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなた方の心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。(フィリ4:6-7)

“求めていることを打ち明けていい”ということは、もし、あなたの思いが間違ったものであるなら、神が諭し、正しいことを教えてくださる。あなたの祈りが神の思いと一致していたなら、“それでよろしい、アーメン”と仰ってくださいということです。

ここで一つの注意が与えられています。「あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない」、「異邦人」というのは神を知らない人のことです。「くどくどと述べる」を“ペラペラとよく喋る”と訳す人もいます(塚本訳?)。神が求められているのは、整った言葉でも、美しく飾り付けられた言葉でもなく、真剣さです。神と私との信頼関係を高めるものが「祈禱、祈り」なのです。

今日は何度か繰り返して、“私たちの神、天の父は、私たちの心を見ておられる”、“神は、私たちの心を知っておられる方である”と話しました。キリストは今日の個所の最後に、このことをはっきり告げられています。「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。神がご存じなら、わざわざ祈ることはないと思われるかもしれませんが。確かに神は、私たちに何が必要であるか、何を望んでいるかを既にご存じであります。

では、何故私たちは祈らなければならないのでしょうか？ 祈りは私たちが“神との親しい交わりに入るように”との招きであるからです。

或る日の説教で、高倉牧師が「祈り」についてこう言われています。

祈りを怠る時、私たちは自分の都合を主として人を批判するようになる。私たちは真剣に祈ることで、誰が私たちの生涯の本当の主であるかを知るのです。

信仰生活とは、日々神に出逢い、神の前に立ち、神を見て生きることです。改めて自分の信仰生活を振り返ってみると、私たちは、“信仰を持っている”と言いながら、実は、神のいない世界、人間だけの世界を生きてはいませんか？ 今日の6節にある通り、神は「隠れたところに」おられます。誰もこの目で見ることは出来ません。しかし、私たちの目の前の人間は確実に目に映ります。目の前にいる人間が、日々、私を評価します。悪評は苦く私を苦しめます。誉め言葉は甘美で誘惑に充ちています。目に見える人の評価は、気にしないで生きるということは難しいことです。結果、私たちは、“目に見えない神を恐れず、目に見える人間を恐れるようになってしまっている”ということはあるでしょう。

私たちの救い主であるキリストは、人から嘲りを受けても、侮辱されても、神に従い続けました。神との深い繋がりがあり、その絆ほどの様な時も切れることがなかったからです。私たちに求められていることは、人からの「報い」を求めめるのではなく、“天の父が報いてくださる”ことを信じ生きることです。

此处でキリストは、何故「施し」と「祈り」について語ったのか、それはこの時、多くの人が伝えられてきたものの外面だけを守って、根本精神を見落としていると感じたからです。教会にとって大切なことは、習慣を上辺で守ることではない、信仰の根本精神への復帰だったに違いないのです。父の前に立ち、神に対して為すべきことを為す。何をすることも、何を祈る時も、目には見なくても、今、私の目の前には、天の父が居てくださることを忘れない。今日の私たちに求められていることです。

主は、言われます。“わたしに求めよ”と。“あなたを造り、あなたに命を与えたわたしにより頼め”と。“最後まで、あなたと一緒になのはわたしだけだ”と。

地上の命がある間にキリストに出逢い、天の父を知った者は幸いです。

お祈りを致します。

天の父よ、この朝も、あなたは私たちを憐れみ、慈しんでくださり、御前へと招き、御言葉を語ってくださいました。この測り知れない恵みを心から感謝致します。私たちは今、あなたの御前に立たされています。あなたが確かに見守ってくださいています。私たちがあなたの憐れみに感謝をして生きる者とならせてください。どうぞ私たちが、どのような所に置かれていても、どのような人たちの間に置かれていても、あなたとの命の交わりに生きる者とならせてください。

これから聖餐を祝います。キリストの命を戴いて、私たち一人ひとりがキリストの体とされていることを深く覚えることが出来ますように。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:520「信実にく清く生きたい」

聖晩餐 使徒信条の告白 和解の挨拶

讃美歌:81「主の食卓を囲み」

献金・感謝(千住由美子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

主イエス・キリストの父なる御神さま、今朝も、この会堂で、オンラインで、また信仰の先達と共に、主にある兄弟姉妹と共に礼拝をお献げすることが出来ましたことを感謝致します。

今日は、私たちとこの世の全てをご存じでおられる神さまが、何時も一番近くにいてくださることを改めて教えていただきました。

そのようにあなたは私どもに必要な物を何時もご存じで、そして与えてくださいます。ここに、お献げしました物を清めて神さまの御用のためにお使いください。

週の初め、あなたが教えてくださいました「祈り」を共に祈り、夫々の新しい歩みをさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌92「主よ、わたしたちの主よ」

派遣と祝福 司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。会衆:私がここにおります。私をお遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。>

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたが一同と共にあるように。アーメン。

報告:①月報委:5月号は第2週に配布、②案内:100周年記念展示「高倉徳太郎先生愛用聖書の展示」本日より2階旧会堂銘板前にて。

後奏:「死に勝ち給いしわれらの救い主」(G.F.カウフマン)